

## 心の清い者の幸い

「八福のメッセージ」の第6として主イエスが語られたことばは「心の清い人々は幸いである、その人たちは神を見る」である。神を見るとは、神との生きた、人格的な交わりのことであって、この世において、しかし特に永遠の御国においての、神との親密な交わりのことを意味している（第1コリント13：12）。すでに学んできたように、主イエスの「八福の言葉」はいずれも、御国の民とされた者に対する祝福の言葉である。その視点からこの主の言葉を読むとき、この第6のメッセージも福音の豊かな恵みで満ちている。

生まれつき罪を持った存在である人間が、どうしたら聖なる神の前に立つことができるか、人はどうしたら、聖なる神にまみゆることができるか、これが聖書の宗教の中心課題であり、そしてそれがキリストの福音が問題とする清さである。「心の清い人々は幸いである」と主が言われるその「清さ」とは、道徳的に真面目な生活を送っているというような外面的な清さのことではない。それは、人間の存在・人格の中心としての「心」すなわち、人間の本性の神との関係における清さ（聖さ）のことである。

律法を守ることに於いて厳格で、道徳的に非のうちどころもないと思われたファリサイ派の教師であるニコデモに対して、主イエスは、「よくよくあなたがたに言うておく。だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われて（ヨハネ3：3／口語訳）本性の生まれ変わり、聖霊による罪のきよめなしに、人は神を見ること、すなわち、神にあいまみゆることはできないことを主は強調された。

その存在の根底において、その本性において罪を負った存在であり、従って神の前に立つことができなくなったアダムの子孫が、キリストの贖いの血しおによって罪を清められ、神の前に立つことができるようにされる、というこの福音の宣言ほど大きな祝福はない。心の清い人とは、そういう人のことであり、そういう人こそ、永遠の御国において顔と顔を合わせて神にまみゆることができるのである。

使徒パウロは言う、「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる」（第1コリント13：12）。そのときとは、すべてのものが新たにされる終わりの時である。そのとき、私たちは皆、顔と顔を合わせて神に直面する、しかし、罪を断罪するさばきの神としてではなく、赦しの神、恵みの神として、神にお会いする。キリスト者は、この確実な約束を希望として、この悩み多き罪の世界を勇気をもって生きる。

次のペトロのことばはそのような希望に生きるキリスト者への勧めのことばである。「あなたがたはキリストを見たことはないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。それは、あなたがたが 信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。・・・だから、いつでも心を引きしめ、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい」（第1ペトロ1：8、9、13）。

## 「この宝を土の器に」

速<sup>はや</sup>水<sup>み</sup>優<sup>まさる</sup>（前日本銀行総裁）

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から艱難を受けても窮しない」。

声高に歌い、共に祈る。さらにわたしは毎回、礼拝堂の正面にある十字架をキリストの象徴と思って見上げ、神と一对一の直接の話し合いを黙ってすることになっている。この神との対面で、過ぎた1週間の自分の行為を反省し、悔い改めて神の前で次の1週間の行動と意志を決めて行く。もとより、顔を挙げる元気もないこともあるし、意志が集中できないこともあるが、こうして自らをリフレッシュできれば幸いである。

もうひとつ、感謝していることは職業観のもち方である。わたしは大学を卒業してから五十六年になるが、日銀に入って三十四年間、民間企業に出て十七年間、そのうちの民間での最初の十年は経営責任者で忙しく、残りは経済同友会の代表幹事など財界活動と私立大学の理事長職などの教育問題とで忙しかった。

そして七十三歳のときに突然、日銀に総裁として戻るように要請された。新日銀法の施行を直前に控え、しかも、金融システム不安の問題、デフレ懸念の問題、日銀内部の問題など問題山積であった上に、新しい日銀法が十二日後に施行され、改善された日銀法のもとでの最初の総裁になるということなので迷ったが、「神の召し」と判断してうけた。

わたしは若い頃から、自分に与えられている職場なり職業は「神の召し(Calling)」と考える習慣というか、プロテスタント的職業観をもって仕事に集中してきた。

総裁時代、国会に呼ばれて難しい質問をうけたり、難しい決断をするときも、いつも「主ともにいます」「主われを愛す」「主すべてを知り給う」ということを自らに語って、上を向いて仕事を進めてきたつもりだ。職業は「神の召し(Calling)」であるという考え方は、学生時代にマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読んで強い影響をうけたものである。

（文芸春秋2004年1月号より）